バラ園植栽管理記録

在　岡　孝　行

概　要

バラ園は，大温室の北側の眺望のよい高台に位置し，約800㎡の平地とその南北の約200㎡の法面とからなっており，日当たりは良いが，風が強い場所である。

昭和52年秋に大苗を植え付け，その後植えたし，56年4月現在ハイブリッドティ種（HT）91品種，フロリブンダ種（F）30品種，ツルバラ種（CL）30品種，ミニ種（Min）17品種，古花，原種を含め約800株，100鉢を栽培している。なお，芝生広場東南側にも20品種60株を植え込んだ約60㎡のバラ花壇がある。

剪定と開花

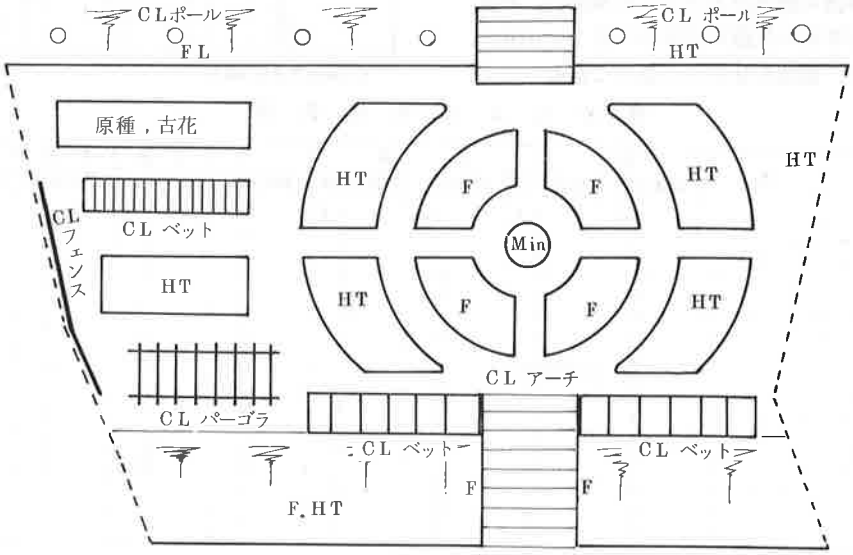
本年度春1番花は5月15日頃から開花し，バラ展期間中の5月24日頃が最盛期であった。2番花は漸次咲き7月20日頃咲き終わっている。秋の花は10月20日前後から咲き始め11月初旬が最盛期であった。春の剪定は，2月5日から始め19日に終了し，秋の整枝剪定は8月24日から9月1日の間に終了している。剪定時期の決定は品種による開花の早晩，秋の気候の予測によって決めた。ツルバラは昨年末に整枝剪定誘引を終えており，開花は6月初旬であった。鉢植えは地植えより1週間程度早く開花する。咲きガラは切り側枝の発生を促した。HTの側蕾はすべて取っているが，夏の整枝はせずに咲かせている。

施　肥

52年秋植込み予定地を深さ1m床掘りし，堆肥等有機物と土壌改良剤を多量投入した。昨年12月は元肥として，バラ園全体で鶏糞60kg，油粕80kg，溶りん60kgを施用し軽く埋め込んだ。4月初旬化成肥料（14－14－14）40kg施用，9月初旬液肥100ℓを施用した。鉢植えバラは生育期間中油粕，骨りん，魚粉を混合，団子にしたものを置肥し，時々液肥も併用した。斜面植込みは肥料の流亡等が激しく施肥しにくいので，有機質の液肥を用い葉面散布を5回行ったが期待どおりの効果は得られなかった。有機物の補給は毎年ワラでマルチングを行ない，腐ったものを埋め込んでいるが，本年は樹皮のチップ粕と芝生の刈り草を施用した。2年間ぐらい堆積したチップ粕は紋羽病の心配はないが，腐りが早く毎年補充する必要がある。芝生は腐りが遅いため2年ぐらい使用でき，防寒，防暑，雑草防止，灌水の省力化，土中病原菌のはね返えり防止等の効果は高いと思われる。

薬剤散布

本年は天候が良く病害虫の発生が少なかった



バ　ラ　園　配　植　図

バラ園植栽の主な品種

系　　統	品　　種　　名
HT.（大輪四季咲）	ピース，タチアーナ，ペータフランケンフェルト，ジェシカ，ブルームーン，クリスチャンディオール，ロイヤルハイネスなど　91品種
F.（中輪房咲四季咲）	アキト，サラバンド，チャールストン，プリンセスミチコ，ファション，メヌエット，フリージャーなど　30品種
CL.（ツル性）	アルティモ，コックテール，エバーゴールド，ニュードン，スパニッシュビュティなど　30品種
Min.（わい性）	ベビーマスチラード，スタリナなど　17品種
古　　花	フラウ・カール・ド・リシュリュ，ハリソンズ・イエロなど　14品種
原　　種	タカネバラ，モッコウバラ，ハマナシなど　40品種

ので，薬散回数も11回と昨年の半分以下であった。薬剤散布は，動力噴霧機で行ない1回の薬量は450 ℓ程度である。落葉時に石灰硫黄合剤を2回散布したが，春先きはかなり病害虫の予防効果がある。開花期に毎年ハナムグリ，コガネムシ類の大被害を受けるが補殺が1番効率的である。ベンレート，サプロールの散布によりウドンコ病の発生は見られなかったが，秋になって，黒斑病が若干見られた。花弁の重い花にはボトリチスが発生し，葉を食害するチュウレンジハバチの被害に合った。ハダニは夏過ぎから発生し，プリクトラン，ケルセン等を散布した。カミキリムシ予防の為殺虫コート（スミチオン＋石灰乳）を幹に塗布した所，被害は全ったくなかった。使用した薬剤は下記のものである。

殺菌剤	ベンレート，サプロール，ポリオキシン，ダイセン類
殺虫剤	スミチオン，ディプテレックス，オルトラン，モレスタン，ランネート

ガン腫病は，本園でもかなりの発生が見られるが，樹の栄養状態がよければ，すぐに枯死することはない。生育期間中に断根すると発生する確率が高いようである。現在多く台木として使用されているノイバラ（*R. multiflora*）から，罹病しにくいと思われるカニナローズ（*R. canina*）に接木したいと考えている。

繁殖・導入

京成バラ園より原種穂木を譲り受け，2月10日に切り接ぎを行った。台木は当園で実生育成した2年目のノイバラである。主な穂木は，*R. foetida, R. nitida, R. bracteata, R. xantnina* 等16種である。約80%活着し，現在鉢で育成中である。その他，メイドンズブラシュ，カナーリバード，スブニルド・マルメゾン等の古花やタカネバラ，オオタカネバラ，イザヨイバラ等の野生種の導入が出来た。外国との種子交換は，中国，カナダ，西ドイツ等10園と行い10月現在10種が発芽し育成している。乾燥しているためか発芽率は良くない。ツクシイバラ×ハッピーが交配親と思われる偶発実生苗が今年春に開花した。八重の小輪で濃赤底白の花で，ツルがよく伸びるのでスタンダードの台木として利用できそうである。

その他

老化して新しいシュートの発生が悪くなった枝に，萌芽促進剤の使用を試みた。使用方法はベーサルシュートの基部の脇芽上下にナイフで傷をつけ，1芽当たり約100 mgを塗布した。チューブ入りペースト状のものを5月に使用したが，ミニ鉢バラでは脇芽促進効果が見られた。